

一 般 演 題 抄 錄

13. 局所麻酔薬と各種麻酔薬のラットくも膜下複合投与における抗侵害刺激作用について

山中重明 江川賢太郎 水口信行 渡辺信介 奥田隆彦* 古賀義久*
 近畿大学ライフサイエンス研究所 *近畿大学医学部麻酔科学教室

実験目的 リドカイン (局所麻酔薬) とフェンタニル (オピオイド作動薬), クロニジン ($\alpha 2$ 作動薬) およびベサネコール (アセチルコリン作動薬) のラットくも膜下複合投与による抗侵害刺激 (鎮痛) 作用の影響について検討した。

実験方法 実験には雄性 SD 系ラットを用いた。くも膜下腔より腰椎膨大部にカテーテルを挿入し、留置後 1 週間を経過し、2% リドカイン 10 μ l を注入し後肢の運動麻痺の発現したラットに対し、鎮痛効果の測定をした。侵害刺激には tail-flick test を用い、尾の逃避運動発現までの潜時を測定した。薬物は局所麻酔薬としてリドカイン、併用薬物としてフェンタニル、クロニジンおよびベサネコールを用いた。対照ラットには、単独投与では鎮痛作用を発現しない濃度の薬物を複合投与した。薬物投与前の逃避潜時を対照値とし、薬物投与後 (5, 15, 30, 60, 90分) に測定した。測定値は %maximum possible

effect (%MPE) を算出して統計学的に評価した。

実験結果 リドカインとフェンタニルおよびクロニジンの複合投与では有意にその潜時時間の延長が認められたが、リドカインとベサネコールとの複合投与ではその潜時時間の延長は認められなかった。

考察 複合投与による抑制機序は、複数の作動薬が同一の受容体を介して相乗的に作用すること、異なる受容体を介して共通の細胞内情報伝達系を作動させること、異なる受容体を介して異なる細胞内情報伝達系を作動させることなどが考えられる。

結語 脊髄における侵害受容において、リドカイン (局所麻酔薬) と、フェンタニル (オピオイド受容体) およびクロニジン ($\alpha 2$ 受容体) の間には、相互作用が存在するが、リドカイン (局所麻酔薬) と、ベサネコール (アセチルコリン受容体) との関係が低いと考えられる。

14. 続発性ヘモクロマトーシスに肝細胞癌 (HCC) を合併した 1 症例

鄭 浩柄 石川恵美 乾 可苗 小村康湖 永島美樹 南 康範
 末富洋一郎 中岡良介 北野雅之 松井繁長 由谷逸朗 上裕俊法
 川崎俊彦 汐見幹夫 工藤正俊 金丸昭久*
 近畿大学医学部附属病院消化器内科 *同医学部第 3 内科学教室

症例 40歳, 男性

主訴 肝障害および肝 SOL の精査, 加療目的

既往歴 14歳時に心室性不整脈にて入院。平成10年3月に十二指腸潰瘍。同5月に肺炎にて入院。アルコール多飲歴はない。

家族歴 父が68歳時 HCC にて死去 (詳細不明)。

現病歴 平成4年骨髓異形成症候群 (MDS RA) と診断され、近医にて赤血球輸血・G-CSF 製剤投与等の外来加療が行われていた。平成9年5月より当院転院となり、濃厚赤血球 2 単位/週輸血・デスフェラル投与などの外来加療が続けられた。軽度の肝障害が認められ、左季肋部痛を訴えたため平成10年3月腹部単純 CT を施行したところ、肝内に多発性の低吸収域が認められた。肝障害の増悪も認め、平成10年6月精査加療目的にて入院となる。

入院時検査所見 血液検査所見では、MDS による汎血球減少および GPT560IU/l と肝障害を認めたが、肝予備能は良好であった。また血清鉄 281 μ g/dl と上昇し、血清フェリチンは 5435 ng/ml と著明な上昇が認められた。肝炎ウイルスマーカーおよび腫瘍マーカーはいずれも陰性であった。

入院後経過 MRI, 肝動脈造影 CT, 門脈造影 CT などの画像診断では肝両葉の多発性 HCC が最も疑われた。エコーガイド狙撃肝腫瘍生検では中分化型 HCC と病理診断され、コントロールとして採取された周囲肝実質の生検組織では肝細胞内への著明な鉄沈着を認めた。以上より続発性ヘモクロマトーシスに合併した多発性 HCC と診断し、平成10年8月肝両葉に LpTAE 療法を施行した。治療は著効し、その後約 2 年 3 ヶ月間外来にて経過観察中であるが、現在のところ再発を認めていない。

考察 本症例における続発性ヘモクロマトーシスの発症機序としては、MDS (RA) による無効造血に伴う鉄の利用障害および吸収過剰に加え、頻回輸血による鉄の供給過剰が挙げられる。遺伝性ヘモクロマトーシスに HCC を合併する確率は、報告により若干の差異は認めるものの約 30% とされており、死因としては最多である。一方、続発性ヘモクロマトーシスに HCC を合併したとする報告は、今回我々の検索し得た範囲では国内外含め 2 例に認められるに過ぎず、きわめて希な症例と考えられた。